

哺乳類相の概要

本県は暖地性から寒地性まで変化に富んだ豊かな植生が見られる。このような立地環境を反映して、県内では7目18科56種の哺乳類の生息が確認されており、この数は我が国で確認されている陸生哺乳類118種の約47%弱に当たり、哺乳類生息の多様性は国内で最高といえる。特に、小型哺乳類についてみるとモグラ目9種、コウモリ目17種、ネズミ目15種など、国内生息種の約73%に当たる41種の生息が確認されており、低地から高山まで多様な環境を有する本県の特徴を反映したものとなっている。

大型哺乳類について見ても、沿岸域に生息する種を除けばツキノワグマ、カモシカ、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザルなど我が国の森林地域に生息する代表的な種の生息が確認されており、県土の豊かな自然環境を示すものといえよう。

選定種の状況

今回現地での調査結果を踏まえ、絶滅危惧Ⅰ類7種、絶滅危惧Ⅱ類6種、準絶滅危惧8種、情報不足1種の計22種を選定した。選定種はすべて頭胴長20cm以下の小型哺乳類で、今回追加したカヤネズミは岐阜県の平野部の水田や河畔などの湿地に生息しているが、急速に生息環境の改変などにより減少してきている。他の種では大半が樹林を生息環境としており、生息に適した樹林の減少あるいは環境の悪化により個体数が減少しているものと推定された。

哺乳類が恒温動物であることは広く知られているところであるが、小型哺乳類は大型哺乳類に比べて体の体積の割に体表面が大きく体外への熱損失が激しい。このため体温を維持するためには、そのエネルギー源となる餌を頻繁に摂取しなければならないという宿命を背負っている。したがって、小型哺乳類の生息に餌生物が豊富にあることが必須条件であり、特に、昆虫類など小動物のみを捕食する肉食性の小型哺乳類にとっては、餌生物となる多様な小動物のいる場所でないとい生息が困難である。

今回の選定種の多くは、こうした肉食性の小型哺乳類が大半を占めており、餌生物が豊かな自然性の高い樹林の減少などの環境悪化が衰退要因として挙げられる。

また、対象種全体の60%がコウモリ類であるが、これらの多くが樹洞を繁殖

や「ねぐら」として利用する種であるため、大径木の少なくなった植生環境に影響を受けると考えられる。時に、絶滅危惧Ⅰ類に選定されたクロホオヒゲコウモリ、モリアブラコウモリ、クビワコウモリ、ノレンコウモリは暖温帯から冷温帯の樹林に生息する種であるが、このような場所は人間の生産活動が活発な場所でもあり、ブナなど落葉広葉樹林の減少により生息環境が著しく悪化していると思われる。

なお、個体の生息域が相対的に広域にわたるカモシカ、ツキノワグマなどの大型哺乳類については、県土の大半が森林で覆われていることもあり、本調査の選定種とする事態には至っていないと判断した。

哺乳類各種のページはこちら

http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11264/sizen/red_data2/mam.html